

埋文やまがた



2018年2月28日

Web版第4号

(第60号)



ゆざのだ 遊佐町 野田遺跡

秋晴れの一日、鳥海山と羽越本線の特急「いなほ」、そして発掘現場を背にした調査スタッフ一同です。ちなみに女性作業員の顔を覆っている黒い布は「はんこたんな」といい、庄内美人をつくる秘密兵器だといわれています。

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

YAMAGATA PREFECTURAL CENTER FOR ARCHAEOLOGICAL RESEARCH

〒999-3246 山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番地 TEL 023-672-5301(代) FAX 023-672-5586

ホームページ : <http://www.yamagatamaibun.or.jp>

メールアドレス : yac@yamagatamaibun.or.jp

平成29年度 文化財普及啓発事業

今年度、山形県埋蔵文化財センターでは、文化財普及啓発事業の一環として、「発掘調査説明会」、「職場体験」、「センター見学・遺跡見学」、「体験学習」、「なつやすみ子どもミュージアム」発掘調査速報会(県教委との共催)「考古学講座」等を実施しました。(予定を含みます。)

発掘調査説明会

	市町村	遺跡名	遺跡種別	開催日
1	川西町	八幡西遺跡	集落跡	9月2日
2	川西町	八幡一遺跡	集落跡	9月2日
3	遊佐町	野田遺跡	集落跡	11月5日
4	遊佐町	下中瀬遺跡	集落跡	11月5日

職場体験

	団体名	期日
1	山形市立蔵王第一中学校	5月17日～19日
2	上山市内中学校「キャリアスタートウィーク」	7月4日～6日

体験学習

	団体名	期日
1	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 「勾玉・弓矢・石器をつくろう！」	5月20日
2	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 「勾玉・弓矢・石器をつくろう！」	8月5日
3	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 「勾玉・弓矢・石器をつくろう！」	11月3日

センター主催研修・講座等

	講座名	期日
1	なつやすみ子どもミュージアム 『やまがたの昔むかし2』	7月18日～ 8月18日
2	埋蔵文化財センター考古学講座「特別講演会」	2月20日
3	埋蔵文化財センター考古学講座「談話会」①	3月1日
4	埋蔵文化財センター考古学講座「談話会」②	3月8日
5	山形県発掘調査速報会2017(県教委との共催)	3月11日

※3月分は予定

発掘調査説明会



センター見学・遺跡見学・施設利用

	団体名	期日
1	大江町教育委員会(遺物鑑定)	4月7日
2	中山町郷土研究会(赤外線による鑑定)	4月18日
3	平成29年度第1回市町村文化財担当者研修	6月7日
4	山形県立山形盲学校中学部 校外学習	6月28日
5	米沢市教育委員会(遺物鑑定・調査指導)	7月4日
6	うきたむ風土記の丘考古資料館(写真撮影研修)	7月5・6日
7	平成29年度第2回市町村文化財担当者研修 【野田遺跡】	7月6日
8	うきたむ風土記の丘考古資料館(写真撮影研修)	8月2日
9	大江町教育委員会(遺物鑑定)	8月10日
10	川西町立大塚小学校【八幡西遺跡】	8月31日
11	舟形町生涯学習センター	9月15日
12	舟形町教育委員会『縄文体験講座Part.3』 【野田遺跡】	9月23日
13	秋田県埋蔵文化財センター【野田遺跡】	10月3・6日
14	米沢市教育委員会(遺物鑑定・調査指導)	10月11日
15	山形県立米沢興譲館高等学校SSH事業	10月17日
16	仙台市縄文の森広場【野田遺跡】	10月18日
17	遊佐町立高瀬小学校【野田遺跡】	10月20日
18	大蔵中学校同級会	10月23日
19	南陽市教育委員会(写真撮影研修)	10月25日
20	東北学院大学文学部	10月25日
21	酒田市教育委員会(遺物鑑定)	11月9日
22	山形県立霞城学園高等学校生涯学習講座	11月30日
23	天童市教育委員会(遺物鑑定)	12月11日
24	寒河江市教育委員会(遺物鑑定)	2月14日



↑ 9月2日 : 川西町 八幡一遺跡

← 9月2日 : 川西町 八幡西遺跡

平成 29 年度「考古学講座」

期日：平成 30 年 2 月 20 日(火)

演題：中国 鄭 城^{ぎょうじょう}における仏教考古学上の重要発見と研究

講師：何 利群^{かりぐん} 氏（東北学院大学大学院客員教授・
中国社会科学院考古研究所副研究員）

解説：佐川正敏 氏（東北学院大学教授）

今年も埋蔵文化財センター「考古学講座」として、特別講演会を公開しました。この講演会は、本来センター職員の職員研修として企画されたものですが、一般の方々にも是非聴いていただこうと思い公開しているものです。

平日で、しかも日中の開催と言うこともあってか、当日の一般参加は残念ながら数名にとどまりましたが、海外の研究者による生の声を聴いていただくことができました。お忙しい中ご参加いただきありがとうございました。



見学等のみなさんです

9 月 15 日 舟形町生涯学習センター



10 月 20 日 遊佐町立高瀬小学校



【野田遺跡】

8 月 31 日 川西町立大塚小学校



【八幡西遺跡】

この他にも多くのセンター及び発掘現場の見学・施設利用がありました。(P2 一覧表参照)
ご利用ありがとうございました。

山形城三の丸跡 第20次 — 街に眠る 古代から近代の暮らし — 山形市

山形城三の丸跡第20次では、三の丸内の北側の国道112号に沿った2ヶ所の調査を行いました。国道112号の改良工事に伴う発掘調査は、平成23年に開始され、7年目の調査となりましたが、今回はM区(城北町)とL区(大手町)の発掘調査を並行して実施しました。

両区とも遺構が検出できる面からは、奈良・平安時代から近世・近代まで、各時代の遺構や遺物が見つかり、人々がこの地に長い期間にわたって暮らしてきた様子がわかりました。市街地の建物の跡地でしたが、現在の地面から1mほど深かったため、後世の攪乱を免れていたようです。

遺構が最も多く見つかったのは、P区(P-5区)とした大手町交差点の近くの調査区で、近世から近代にかけての水路や水場と考えられる石組みの施設が検出されました。調査区の多くが河川の氾濫による川原石で覆われており、これらの石を掘り込んで遺構が作られており、水場遺構からは16世紀末～17世紀初め頃の佐賀県で焼かれた皿の破片が出土しました。

またM区(M-2区)とした城北町の調査区では、近世～近代の遺構面のさらに下から、奈良・平安



M2区全体写真。上方の1段低い面から、奈良・平安時代の土器が出土しました。

時代の土器の破片が多数出土しました。

江戸時代には武家屋敷となっていたこの一帯は、古代から既にある程度の規模の集落が存在しており、そうした集落を基盤に城下町が形成され、近代の山形市街地につながったと考えられます。今回調査した三の丸の北側は、後世の開発があまり進まなかったため、土が厚く堆積しており、遺構や遺物が良好な状態で残っておりました。

(小林圭一)



石を組んだ水場遺構(P-5区東側)。遺構内から肥前皿(16世紀末～17世紀初め)が出土しました。



P-5区西側の全体写真。地面多くが川原石で覆われています。

最上川にそそぐ元宿川左岸の低地に位置している遺跡です。第1次調査では、『佛法為』と刻まれた平安時代の須恵器小型壺や、北部九州で制作された鎌倉時代の滑石製石鍋、板碑、五輪塔、相輪など仏教に関する遺物などが出土しました。また、遺構は中世の素掘り井戸、木製井戸枠付井戸、近世の木棺墓などが見つかりました。

第2次調査区は、第1次調査時に着手できなかった場所です。狭い面積を対象とした調査でしたが、7基の素掘り井戸、1基の木製枠付井戸、4基の土坑などが見つかりました。

見つかった井戸のうち、水が湧く深さまで掘り下げられていたものは3基だけでした。ほかの5基は帯水層まで達しておらず、湧水はありませんでした。また、第1次調査時にも、すぐ近くで湧水のある素掘り井戸が1基見つかっています。

湧水が無いものを井戸と呼べるのか疑問がありますが、狭い範囲に集中していることから、良質な水が出てくる場所を探して試し掘りをした結果ではないかと考えています。帯水層は周囲一帯に広がっているはずで、ある一定の深さに達すれば湧水を得られたでしょう。おそらく、濁らない水を得るために、帯水層より上位の層に泥炭が含まれていない場所を探し、泥炭が含まれている層に当たった試し掘り井戸はそのまま放棄されたのだろう



第2次調査区の全景(上が北)
多数の井戸が密集して見つかりました。



木製枠付井戸の完掘状況(深さ2.4m)
深さは帯水層まで達しており湧水がありました。
下段以外の木製枠は抜き取られていました。



素掘り井戸の完掘状況(深さ3m)
最下層は帯水層(砂層)であり、湧水がありました。

と考えています。

井戸からは曲物や須恵器が出土しましたが、詳しい年代はこれから分析する予定です。

第1・2次調査区は湿地とその周辺部に位置しており、遺跡の中心部から外れています。調査区で出土する遺物は北側にある微高地から廃棄されたものが大半と考えられます。きっと北側の微高地上には古代・中世を中心とした集落が眠っていることでしょう。出土遺物からは、宗教色の強い施設の存在もうかがわれます。

(水戸部秀樹)



二重の濠に囲まれた近世屋敷地(右上が北)



並列する2基の屋敷墓

八幡西遺跡は川西町北端の郊外(大字西大塚)に所在します。昨年度(第1次)は湿原の辺の古代(奈良平安)集落と、方格状の地割に基づく近世近代(江戸～戦前)集落(村)を調査しました。今回の第2次調査ではいずれもその広がりを確認し、それぞれ集落全体の構造に迫る知見が得られました。

古代では湿原に面した微高地に竪穴建物2棟・掘立柱建物3棟の各単位が点在します。1次調査の成果を合わせると、およそ4組の建物群配置が認められるようです。



柱(根本)がそのまま残る掘立柱建物

近世では二重の濠で区画された村落成立時(江戸前期)の屋敷地が見つかりました。濠は発掘区の制約から北辺と東辺を検出するにとどまりましたが、屋敷地を取り囲むものと推定されます。濠は上幅3.0m弱・下幅0.4～1.4mで、深さは1.5mもあります。濠割の内部空間は埋没した湿地帯と重なりますが、地勢にかまわず約500個の柱穴が密集し、掘立柱建物10棟弱・柱穴列3列ほどの組合せが見込まれます。中には構成する柱穴に柱根が全て遺存する建物もありました。木製遺物の残りの良さはこの遺跡の特性ですが、水路に接続する水場(方形木組遺構)や昇降施設(踏面2段組)を伴う大型土坑など、木製構造物とセットの遺構からは生活の様子が生々しく具体的に見えてきます。また、濠以北は屋敷地の外界とみられますが、北辺の中央寄りに並列する2基の土葬墓(木棺直葬)があります。敷地北側に守り神として供えた先祖の屋敷墓でしょうか。男性墓から煙管が、女性墓からは紅皿や有機質小玉が出土し、被葬者の性格の一端がうかがわれます。

(菊池玄輝)

下中瀬遺跡は、秋田県境に近い遊佐町北部の庄内高瀬川左岸の自然堤防上に立地します。

今回の調査では、奈良時代末～平安時代(約1,200年前)の集落跡、その上層から江戸時代(約400年前)の堀跡が見つかりました。

奈良～平安時代では、土坑跡や溝跡、小ピットなどが確認されました。遺物では須恵器や土師器の坏、蓋、甕、壺などが出土し、他に県内で数少ない製塩土器(写真左)が出土しました。

製塩土器は、植木鉢状の形で、製作時の粘土紐の積み上げ痕跡をよく残すのが特徴で、一般に海水を濃縮させ、煮詰めて塩を取り出すための土器と考えられます。出土品も内面に剥離があるものや小破片が多く、長時間加熱されたことがうかがえます。また、厚手の大形品と薄手の小形品があり、前者は海岸部での煮沸工程用、後者が集落に持ち帰った濃縮塩の焼塩または固形塩の製造工程用と推測されます。

当時近接する海や河川を利用した塩作りや運搬が盛んに行われていたのかもしれませんが。

江戸時代では、堀跡や土坑、墓坑、溝跡などが発見されています。遺物では、陶磁器や漆器、下駄や

井戸枠、建築部材などの木製品、古銭などが出土します。

堀跡は、調査区東側から中央部にかけて、幅約2mのS D16・18堀跡が近接する高瀬川に沿って南北に2条に並びます。またそれに直交しS D29・S D33堀跡が東西に並びます。

出土遺物からは、概ね江戸時代初め(下層)に掘られ、江戸時代前半(中層)には徐々に埋没し、江戸時代後半～幕末(上層)には人為的に埋め戻され、S K22土坑跡やS E31井戸跡が新たに構築されます。

更に、直交する堀跡群に囲まれた調査区西側には、S K22土坑跡やS X41溝跡があります。前者は炭化した木製品や複数の古銭が出土した長方形の墓坑跡、後者は溝がコの字状に回る形状から祭祀に関わる遺構が推測されます(写真右)。

これらからは、調査区南側に広がる江戸時代の屋敷跡が推測され、調査区南西側には「(屋敷跡の前谷地)」字名もあります。概ね調査区は、この屋敷跡の外郭にあたり、全体に葬礼や祭祀に関連した性格も推測されました。

(植松暁彦)



製塩土器(左下底部。右口縁部。→は粘土紐痕)



直交する2条の堀跡群(手前)と土坑墓(奥)

前号 考古学クイズ の答え

①

高畠町にある押出(おんだし)遺跡では、これまでの発掘でも縄文時代の漆塗り土器が出土しています。今回の出展のメインも小型の彩漆土器でしたが、従来の鉢形とは異なり、壺型をしているのが大きな特徴です。これまでも27年度の年報や、埋文やまがた56号でも紹介してきましたので、興味を持たれた方は、そちらもご覧になってみて下さい。

野田遺跡は、秋田県境に近い遊佐町北部にあり、庄内高瀬川右岸の自然堤防上に立地し、標高は約3m前後を測ります。下中瀬遺跡とは、西側に直線距離で約1kmと近接します。

今回の調査では、奈良時代末～平安時代(約1,200年前)の集落跡が発見されました。

日本海沿岸東北自動車道の計画路線が集落跡の中心部を横断する形となったため、調査区内から集落を構成する建物群や井戸跡、土坑跡、溝跡などが検出され、当時の一般集落の構造が明確に分かったことが成果として挙げられます。

調査区では、東と西側に低湿地があり、それに挟まれた中央部に、幅約30mの微高地が南北方向に長さ約100m以上続きます。

大半の遺構は、この微高地上にあり、建物群は集落の中央部に、井戸跡や大型の土坑は集落の南端と北端にまとまって造られたようです。

個別の遺構では、掘立柱建物が7棟以上確認され、SB1～3建物跡の重複から3時期以上の建て替えもうかがえました。但し他の建物は小規模だったり、間尺が大きかったりし、一般的な古代の建物とはやや様相の異なるものが多いのも特徴としてあげられます。

井戸跡は、4基以上発見され、SE101井戸跡(写真左)が縦板・横棧の木組みが見られた井戸跡で、他は素掘りの井戸跡でした。

特にSE101井戸跡の井戸枠内からは十和田a火山灰層(915年降灰)と見られる白色土も確認され、実際の年代が分かる資料として注目されます。また掘方からは、県内で初出の「嶋」と墨書きされた土器も見つかり、他にも複数出土していることから当時集落に住んだ人の氏(ウジ)名を表している可能性が考えられます。

土坑跡は6基以上確認しました。特にSK2・SK102土坑跡では、県内で数少ない齋串(いぐし)がまとまって出土しました。齋串は、小型の塔婆状の木製品で、お祓いなどの祭祀に使われたと考えられます(写真右)。

出羽国(山形県・秋田県)では、9世紀中頃に地震(833年・850年)や鳥海山噴火(871年)が相次ぎ、朝廷から「陰陽師」が全国に先駆けて派遣されます。

出土した齋串は、この時期を前後する年代のもので、当時のこの地域の自然災害から身を守ろうとした祭祀の実態を知る上で貴重な資料となります。

(植松暁彦)



SE101 井戸跡(井戸枠の礫下に火山灰出土)



SK2 齋串出土状況(矢印が齋串)

編集後記

本誌を編集している今、平昌冬季オリンピックが大詰めを迎えています。日本人選手が大活躍でワクワクの毎日です。そういえば、スキー場へはもう何年も

行っていないことに気づきました。炬燵蜜柑は最高ですが、メタボ解消のためには、少し運動を心がけないといけないと、ちょっとだけ反省(苦笑)。